

6.3 動物

(1) 哺乳類

1) 事後調査の結果

環境影響評価時及び供用後の事後調査の確認結果を表 6-51 に示した。

供用後の事後調査結果、6 目 8 科 13 種の哺乳類を確認した。環境影響評価時には、6 目 9 科 16 種が確認されており、春季や秋季の確認が多かった。

アズマモグラ、ノウサギ、アカネズミ、タヌキ、キツネといった、草地から樹林にかけて生息する種のほか、ニホンリス、ヒメネズミ、テンといった樹林性の哺乳類が確認され、調査範囲の環境を反映した結果が得られた。また、コウモリ類の捕獲はなかったが、コウモリ類の超音波を捉えるバットディテクターを使用した夜間調査によりコウモリ類の超音波が確認された。確認された周波数は 40~60kHz であったことから、検知されたコウモリ類は、アブラコウモリあるいはモモジロコウモリの可能性があると考えられた。

表 6-51 環境影響評価時及び供用後の事後調査の確認結果（哺乳類）

No.	目名	科名	種名	環境影響評価					供用後の事後調査			環境影響評価調査		供用後の事後調査	
				冬季	春季	秋季	冬季	夏季	春季	夏季	秋季	冬季	H17~18年	H25~26年	
1	モグラ目(食虫目)	モグラ科	ヒミス									●			●
2			アズマモグラ	●	●	●			●		●				●
3	コウモリ目(翼手目)	キクガシラコウモリ科	キクガシラコウモリ					●						●	
4		ヒナコウモリ科	モモジロコウモリ					●						●	
5			アブラコウモリ					●						●	
			ヒナコウモリ科の一種			●							○		
			コウモリ目の数種					○		●※2			○		●※2
6	ウサギ目	ウサギ科	ノウサギ	●	●				●			●		●	●
7	ネズミ目(齧歯目)	リス科	ニホンリス	●	●	●	●		●		●		●		●
8			ムササビ		●	●							●		●
9		ネズミ科	アカネズミ	●	●	●			●				●		●
10			ヒメネズミ		●				●				●		●
			ネズミ科の一種※1	●									●		●
11	ネコ目(食肉目)	イヌ科	タヌキ	●	●				●		●	●		●	●
12			キツネ	●	●	●	●		●		●	●		●	●
13		イタチ科	テン	●	●	●			●		●	●		●	●
14			イタチ		●				●				●		●
15			アナグマ			●							●		●
16		ジャコウネコ科	ハクビシン								●	●			●
17	ウシ目(偶蹄目)	ウシ科	カモシカ		●	●			●		●		●		●
			ウシ目の一種	●									○		
合計種数				9種	11種	10種	2種	3種	10種	1種	8種	5種	6目9科16種	6目8科13種	

注) 表中の「○」は合計種数に含めない種を示す。種名未確定のものが他の確認種の可能性がある場合は、合計種数に含めていない。
 ※1: 痕跡調査で死体を確認し、クマネズミもしくはドブネズミであると推測されたが、損傷があり同定が困難であった。種数計数の対象とする。
 ※2: コウモリ類の捕獲はなかったが、バットディテクターでの確認(周波数が40~60kHzで、アブラコウモリもしくはモモジロコウモリの可能性がある)があり合計種数に含めた。

供用後の事後調査で確認された哺乳類の注目すべき種を表 6-52 に、その確認結果を図 6-53 及び図 6-54 に示した。

供用後の事後調査で確認した哺乳類のうち、注目すべき種として 8 科 10 種が選定された。このうち、法定種・レッドリスト掲載種・仙台市の学術上重要種に該当する種は、モモジロコウモリ（の可能性がある確認）、タヌキ、キツネ、カモシカであった。残る 6 種は、仙台市の注目種（減少種、環境指標種、ふれあい種）に該当した。

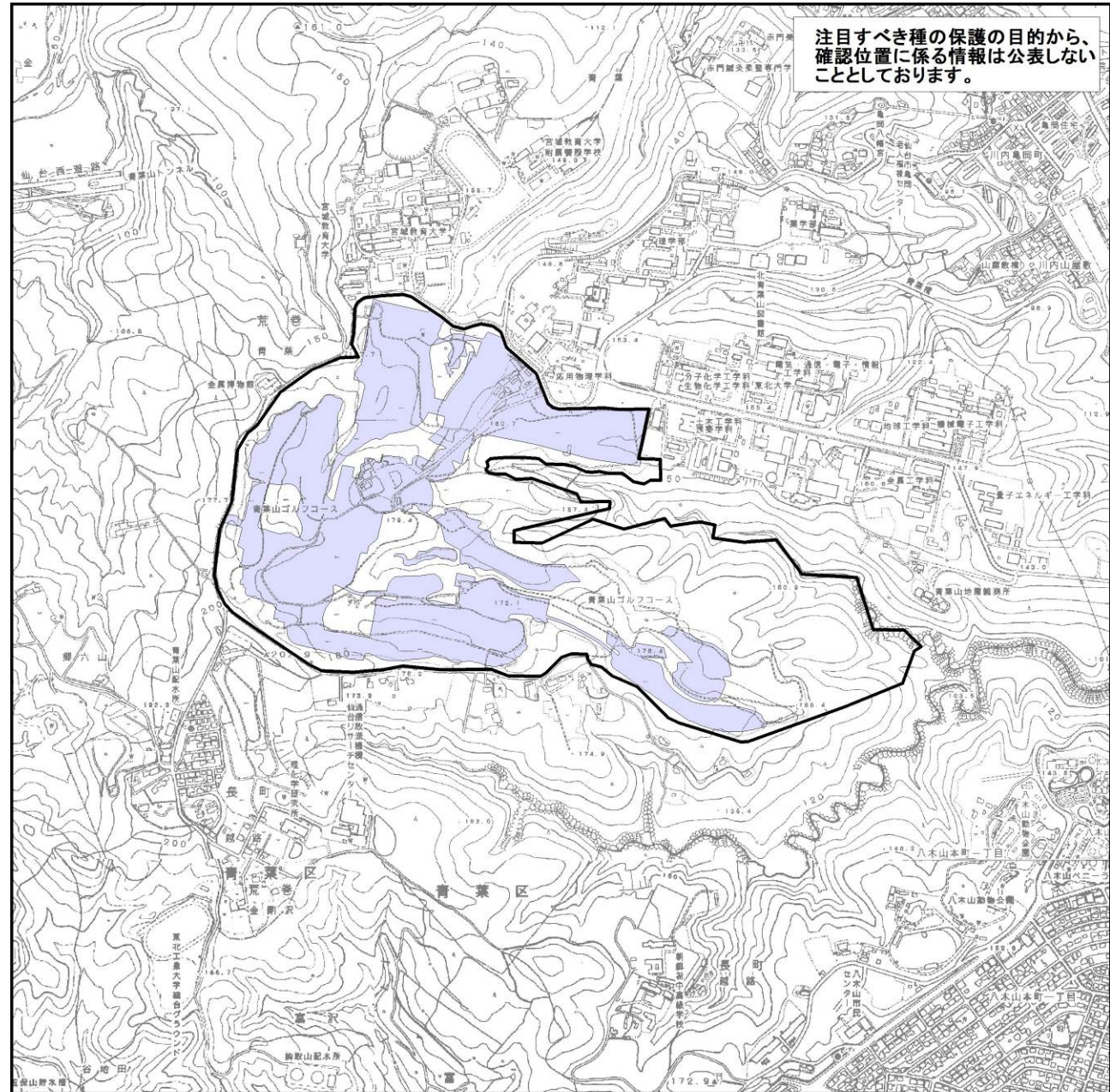
表 6-52 注目すべき種（哺乳類）

No.	目名	科名	種名	選定基準※															
				1	2	3	4	5	5"	6	6"	7		7"					
												学術上	注目種	学術上	注目種				
1	モグラ目(食虫目)	モグラ科	アズマモグラ																
2	コウモリ目(翼手目)	ヒナコウモリ科	モモジロコウモリ*								1.4	C			1.4	C			
3	ウサギ目	ウサギ科	ノウサギ													C		触	
4	ネズミ目(齧歯目)	リス科	ニホンリス													C		触	
5		ネズミ科	ヒメネズミ									C	指			C		指	
6	ネコ目(食肉目)	イヌ科	タヌキ													C		指	触
7			キツネ																
8		イタチ科	テン										C	触		C		指	
9			イタチ											指	触	C		指	触
10	ウシ目(偶蹄目)	ウシ科	カモシカ	特天	主要					注目	注目	4				触		指	触

注) ■の列は「法定種・レッドリスト掲載種等」を、■の列は「仙台市の注目種」を示す。
 * : コウモリ類の捕獲はなかったが、バットデテクターでの確認があり、周波数が40~60kHzで、アブラコウモリもしくはモモジロコウモリの可能性があり、モモジロコウモリが注目すべき種であるため、参考として記載する。

- ※ 選定基準
- 1: 「文化財保護法」特別天然記念物(特天)、天然記念物(天然)
 - 2: 「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律」国内希少野生動植物(国内)、国際希少野生動植物(国際)
 - 3: 「緑の国勢調査—自然環境保全調査報告書—」(1976年 環境庁)主要野生動物(主要)
 - 4: 「第2回緑の国勢調査—第2回自然環境保全基礎調査報告書—本編・資料編」(1983年 環境庁)調査対象種(対象)
 - 5: 『鳥類、爬虫類、両生類及びその他無脊椎動物のレッドリストの見直しについて』(環境省報道発表資料、2006年)絶滅(Ex)、野生絶滅(EW)、絶滅危惧 I A類(CR)、絶滅危惧 I B類(EN)、絶滅危惧 II類(VU)、準絶滅危惧(NT)、情報不足(DD)、絶滅のおそれのある地域個体群(LP)
 - 5": 第4次レッドリストの公表について(2012年 環境省)絶滅(Ex)、野生絶滅(EW)、絶滅危惧 I A類(CR)、絶滅危惧 I B類(EN)、絶滅危惧 II類(VU)、準絶滅危惧(NT)、情報不足(DD)、絶滅のおそれのある地域個体群(LP)
 - 6: 「宮城県の希少な野生動植物—宮城県レッドデータブック—」(2001年 宮城県)絶滅(Ex)、野生絶滅(EW)、絶滅危惧 I類(CR+EN)、絶滅危惧 II類(VU)、準絶滅危惧(NT)、情報不足(DD)、絶滅のおそれのある地域個体群(LP)、要注目種(注目)
 - 6": 「宮城県の希少な野生動植物—宮城県レッドリスト2013年版」(2013年 宮城県)絶滅(Ex)、野生絶滅(EW)、絶滅危惧 I類(CR+EN)、絶滅危惧 II類(VU)、準絶滅危惧(NT)、情報不足(DD)、絶滅のおそれのある地域個体群(LP)、要注目種(注目)
 - 7: 「平成15年度自然環境に関する基礎調査業務 報告書」(2003年 仙台市)学術上重要な種(学(1:元々希、2:分布限界、3:模式産地、4:他))、減少種(減(A:ほとんどみられない、B:激減、C:減少))、環境指標種(指)、ふれあい保全種(触)
 - 7": 「仙台市自然環境に関する基礎調査業務委託 報告書」(2011年 仙台市)B:激減、C:減少))、環境指標種(指)、ふれあい保全種(触)

※テンは、評価書では選定基準 3 の主要野生動物とされたが、これは誤認であった。



注目すべき種の保護の目的から、確認位置に係る情報は公表しないこととしております。

凡例

- 対象事業実施区域
- 調査範囲
(対象事業実施区域境界より200m)
- 改変エリア

- 確認地点
- カモシカ
 - キツネ
 - タヌキ
 - コウモリ目の一種
(モモジロコウモリの可能性のある地点)

- 確認方法
- 2: 姿
 - 4: 足跡
 - 7: 糞
 - 9: バットデテクター

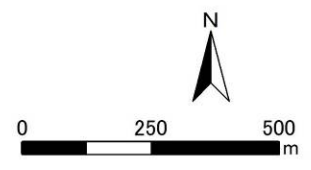


図 6-53 供用後の事後調査で確認された注目すべき種（哺乳類）
(法定種、レッドリスト掲載種、仙台市の学術上重要種)

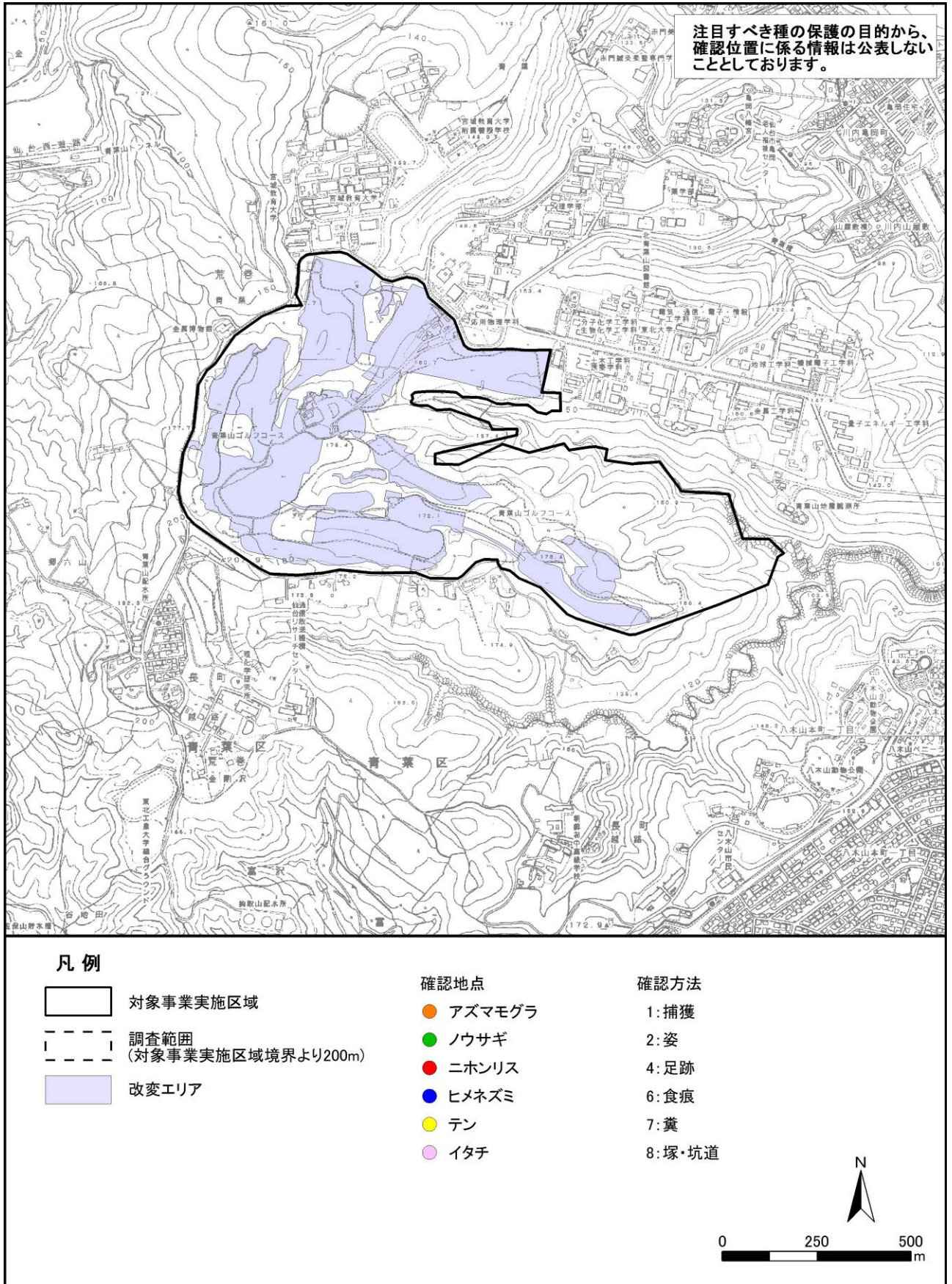


図 6-54 供用後の事後調査で確認された注目すべき種（哺乳類）
（仙台市の減少種、環境指標種、ふれあい種）

2) 予測結果の検証

環境影響評価時及び供用後の事後調査における調査時期を表 6-53 に示した。環境影響評価時に予測評価の対象とした種のうち、供用後の事後調査での確認結果を表 6-54 に示した。

環境影響評価時に予測評価を行った8種のうち、供用後の事後調査において4種が確認された。供用後の事後調査では、コウモリ類の捕獲はなかったが、バットディテクターを用いた夜間調査により、アブラコウモリあるいはモモジロコウモリ（40～60kHz）の可能性のある周波数帯が検知された。一方、キクガシラコウモリの周波数帯は65～70kHzとされるが、供用後の事後調査では検知されなかった。次頁以降に評価書で予測評価の対象とした種について、予測結果の検証を行い、その内容を記した。ただし、環境影響評価時と供用後の事後調査では、コウモリ類の調査について、調査実施回数等に差があり、調査結果の単純な比較は困難ではあるが、概ね検証可能な調査結果が得られた。なお、コウモリ類の調査について、横坑調査は事後調査で実施していないため、環境影響評価時の方が調査実施状況が多くなっているが、夜間調査及び捕獲調査においては、事後調査の方が調査回数が多くなっている。

検証の結果、生息を確認できていない種もあったが、それらの生息場として重要な環境である樹林及び水辺について、既存樹林を極力残すこと、水域の保全を行ったこと、さらに、哺乳類の移動性に寄与する水と緑のネットワークの保全を行ったことにより、事業による哺乳類への影響は、事業者の実行可能な範囲内で最大限の低減措置を図っていることから、追加の環境保全措置を実施する予定はない。

表 6-53 環境影響評価時及び供用後の事後調査における調査時期

調査項目	評価書(H17～18)				供用後の事後調査(H25～26)			
	春	夏	秋	冬	春	夏	秋	冬
目視・痕跡調査	●	—	●	●	●	—	●	●
小型哺乳類捕獲調査	●	—	—	—	●	—	—	—
コウモリ類	横坑調査	—	●	—	●	—	—	—
	夜間調査	—	●	—	—	—	●	●
	捕獲調査	—	—	●	—	—	●	●

注) 調査実施日は5章参照。

表 6-54 環境影響評価時に予測評価の対象とした種のうち、供用後の事後調査での確認結果（哺乳類）

No.	目名	科名	種名	環境影響評価	供用後の事後調査
				H17～18年	H25～26年
1	コウモリ目(翼手目)	キクガシラコウモリ科	キクガシラコウモリ	●*1	
2		ヒナコウモリ科	モモジロコウモリ	●	○*2
3	ネズミ目(齧歯目)	リス科	ムササビ	●	
4	ネコ目(食肉目)	イヌ科	タヌキ	●	●
5			キツネ	●	●
6		イタチ科	テン	●	●
7			アナグマ	●*1	
8	ウシ目(偶蹄目)	ウシ科	カモシカ	●	●

*1 キクガシラコウモリ及びアナグマについては、調査範囲外での確認であった。

*2 コウモリ類の捕獲はなかったが、バットディテクターでの確認があり、周波数が40～60kHzで、アブラコウモリもしくはモモジロコウモリの可能性があり、モモジロコウモリが注目すべき種であるため、参考として記載する。

(7) キクガシラコウモリ

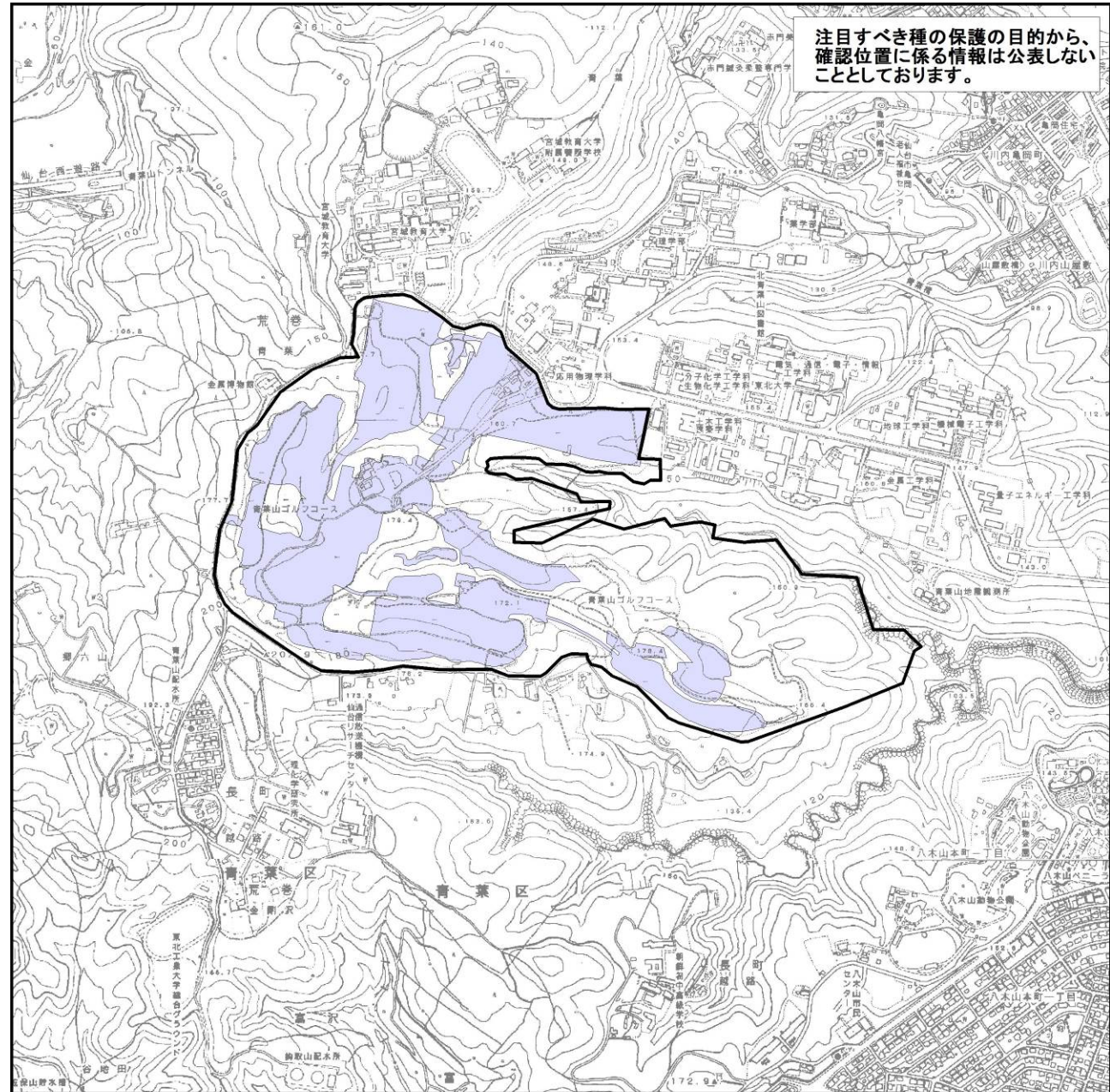
キクガシラコウモリの影響予測結果と確認状況を表 6-55 に、環境影響評価時と供用後の事後調査におけるキクガシラコウモリの確認地点を図 6-55 に示した。

供用後の事後調査では、本種は確認されなかった。環境影響評価時には、調査範囲である対象事業実施区域境界から 200m 範囲よりさらに離れた場所で本種が 2 個体確認された。対象事業実施区域内には本種のねぐらとなる洞穴はないため、本種の生息場への事業の影響は、予測結果のとおり小さかったと考えられる。また、本種の採餌場となる森林については、対象事業実施区域での保全に努め、既存樹林地を極力残しており、本種の採餌環境の維持に努めている。事業による本種への影響は、事業者の実行可能な範囲内で最大限の低減措置が図られていると考えられる。

表 6-55 影響予測結果と確認状況（キクガシラコウモリ）（哺乳類：1/8）

種名	影響要因	環境影響評価時		調査年度	確認地点数		
		予測結果	影響の程度		調査範囲	施区域 対象事業実	改変エリア
キクガシラコウモリ	存在・供用	対象事業実施区域外で確認されており、対象事業実施区域は本種の生息の本拠及び採餌場とは異なる環境であることから、供用時の本種への影響もないか極めて少ないものと考えられる。	ほとんど影響なし	環境影響評価 (H17～18)	0*	0	0
				供用後の事後調査 (H25～26)	0	0	0

*評価書では 2 地点と記載していたが、調査範囲外での確認であった。



注目すべき種の保護の目的から、
確認位置に係る情報は公表しない
こととしております。

凡例

- 対象事業実施区域
- 調査範囲
(対象事業実施区域境界より200m)
- 改変エリア

- H17～H18確認種
- キクガシラコウモリ

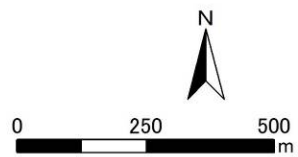


図 6-55 キクガシラコウモリ確認地点

(イ) モモジロコウモリ

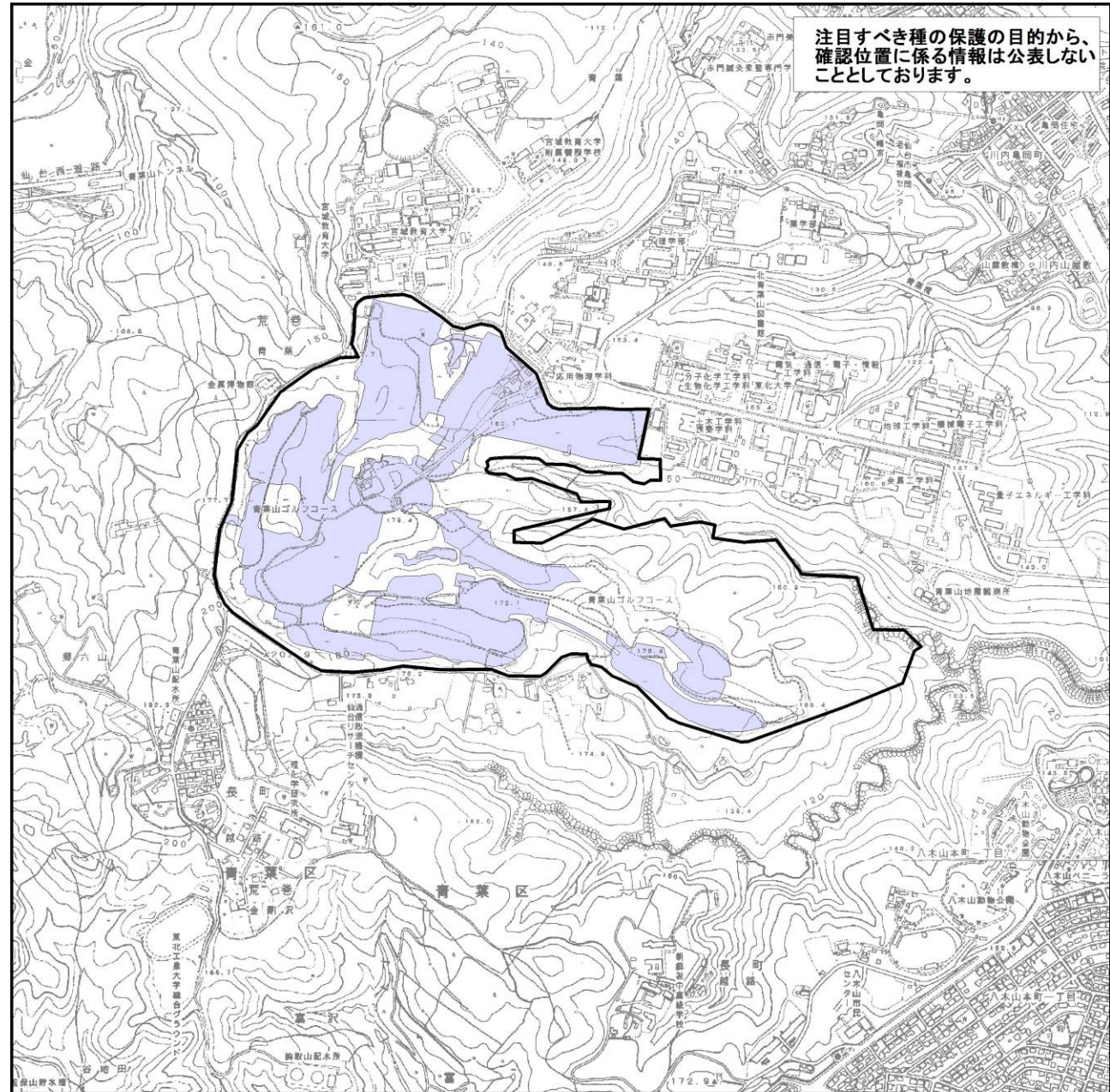
モモジロコウモリの影響予測結果と確認状況を表 6-56 に、環境影響評価時と供用後の事後調査におけるモモジロコウモリの確認地点を図 6-56 に示した。

環境影響評価時には、カスミ網を用いたトラップ調査により、調査範囲の 1 地点及び対象事業実施区域の 1 地点において、1 頭ずつ本種を捕獲した。供用後の事後調査では、環境影響評価時と同じ 3 地点及び任意の 2 地点で夏季及び秋季にカスミ網を用いたトラップ調査を行ったが、本種は捕獲されなかった。ただし、バットディテクター調査により、本種の可能性が高いと考えられる超音波帯 (40～60 kHz) を環境影響評価時に捕獲された地点と同じ [redacted] で 15 回確認したことから、本種は造成工事後も対象事業実施区域及び周辺を飛翔していると考えられる。したがって、事業による本種への影響は、予測結果のとおり、ほとんどなかったと考えられる。

表 6-56 影響予測結果と確認状況 (モモジロコウモリ) (哺乳類 : 2/8)

種名	影響要因	環境影響評価時		調査年度	確認地点数		
		予測結果	影響の程度		調査範囲	施対象事業実 区域	改変エ リア
モモジロコウモリ	存在・供用	対象事業実施区域外で確認されており、対象事業実施区域は本種の生息の本拠および採餌場とは異なる環境であることから、供用時の本種への影響もないか極めて少ないものと考えられる。	ほとんど影響なし	環境影響評価 (H17～18)	2	1	0
				供用後の事後調査 (H25～26)	1*	1	0

*バットディテクター調査によるモモジロコウモリの可能性がある超音波帯を検知した地点。



注目すべき種の保護の目的から、
確認位置に係る情報は公表しない
こととしております。

凡例

- 対象事業実施区域
- 調査範囲
(対象事業実施区域境界より200m)
- 改変エリア

H25～H26確認種

- コウモリ目の一種(モモジロコウモリの可能性がある地点)

H17～H18確認種

- モモジロコウモリ

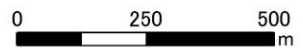


図 6-56 モモジロコウモリ確認地点

(ウ) ムササビ

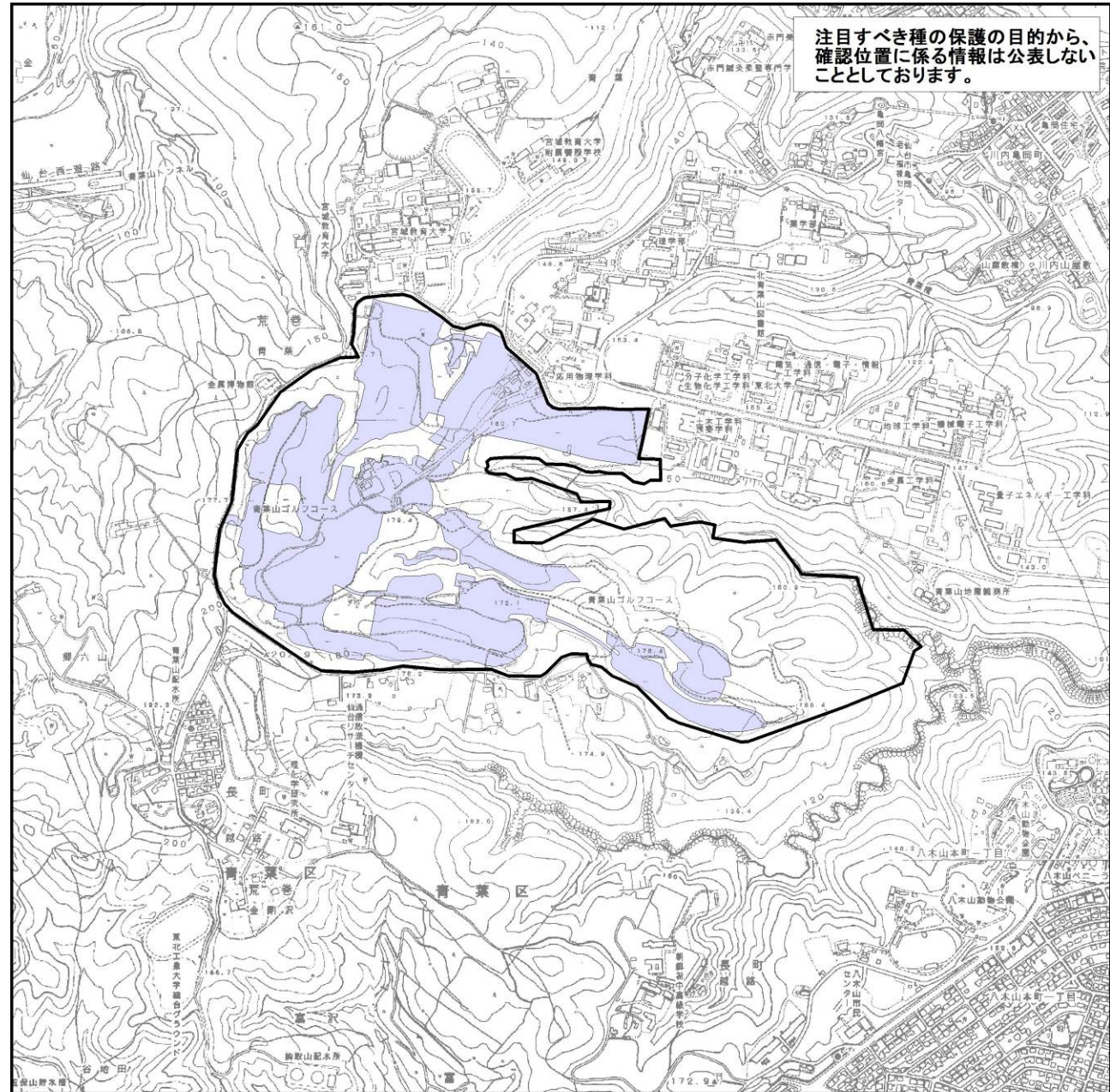
ムササビの影響予測結果と確認状況を表 6-57 に、環境影響評価時と供用後の事後調査におけるムササビの確認地点を図 6-57 に示した。

供用後の事後調査では、本種は確認されなかった。環境影響評価時には、本種は調査範囲の 2 地点で確認され、改変エリアから 300m 以上離れた場所であった。本種が利用するような大径木がみられる樹林は、対象事業実施区域にはもともとなかったため、事業による本種への影響はほとんどなかったと考えられる。ただし、環境影響評価時の本地域の環境は、使用されていないゴルフ場であったのに対し、供用後の事後調査時には、土地が造成され建物等の建設工事が行われており、本種がこういった状況を忌避した可能性は否定できない。

表 6-57 影響予測結果と確認状況（ムササビ）（哺乳類：3/8）

種名	影響要因	環境影響評価時		調査年度	確認地点数		
		予測結果	影響の程度		調査範囲	施区域 対象事業実	改変エリア
ムササビ	存在・供用	本種が確認された大径木がみられる樹林は改変エリアと充分離れていることから、供用時の本種への影響もないか極めて少ないものと考えられる。	ほとんど影響なし	環境影響評価 (H17～18)	2*	0	0
				供用後の事後調査 (H25～26)	0	0	0

*1 評価書では、調査範囲 1 地点で確認と記載していたが、再度、調査データを精査した結果、調査範囲 2 地点での確認であった。



注目すべき種の保護の目的から、
確認位置に係る情報は公表しない
こととしております。

凡例

- 対象事業実施区域
- 調査範囲
(対象事業実施区域境界より200m)
- 改変エリア

H17～H18確認種

● ムササビ

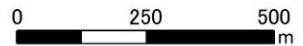


図 6-57 ムササビ確認地点

(I) タヌキ

タヌキの影響予測結果と確認状況を表 6-58 に、環境影響評価時と供用後の事後調査におけるタヌキの確認地点を図 6-58 に示した。

本種の確認は、環境影響評価時には調査範囲で 6 地点であったが、供用後の事後調査においては調査範囲で 44 地点となり、確認地点数が顕著に増加した。ゴルフ場当時と比較して、植生管理の方法が変わったことで、本種の生息に適した環境が増えた可能性がある。

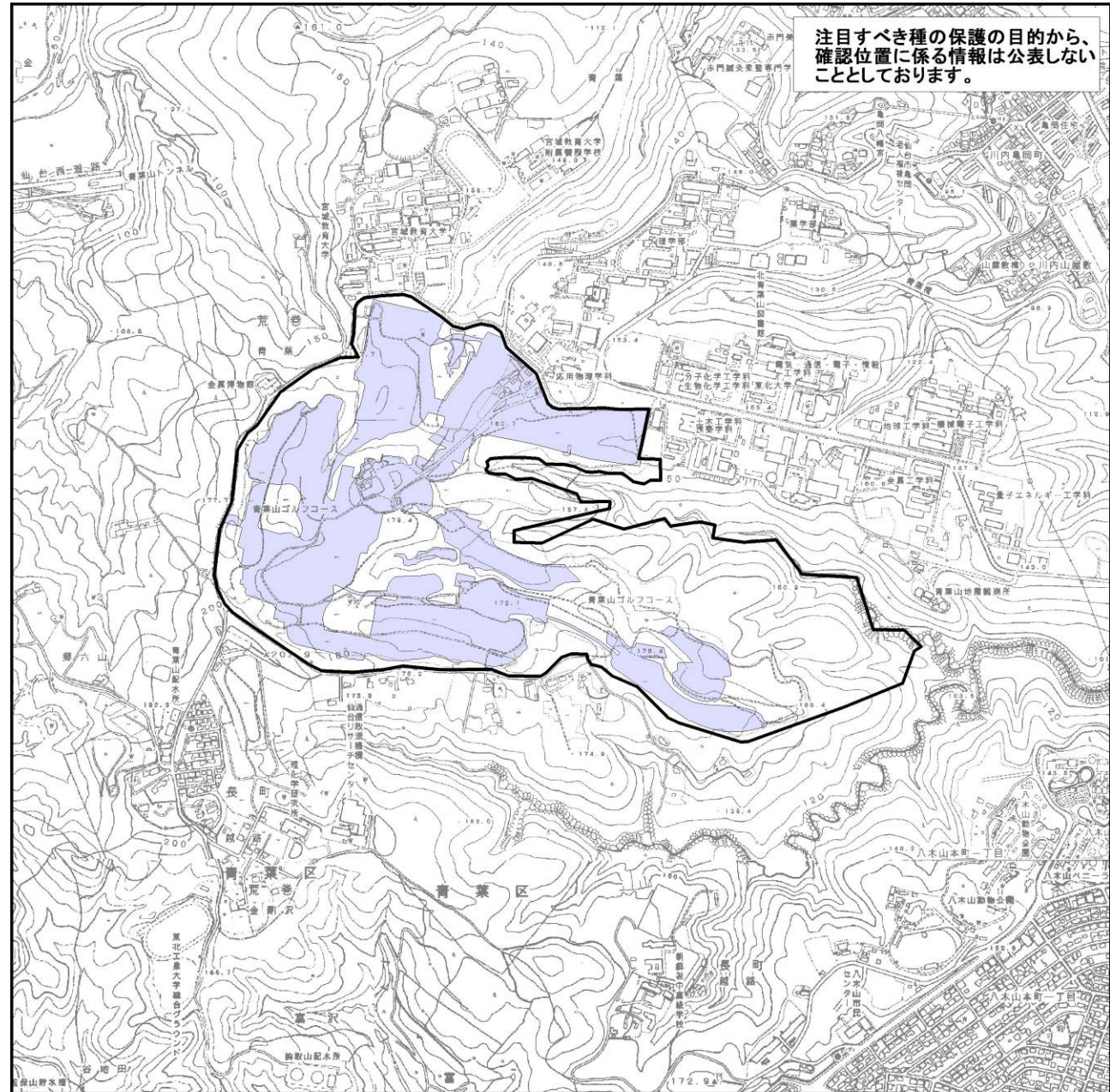
なお、今後さらに供用が進むと、人の存在を警戒し、対象事業実施区域及び周辺の利用は減少すると予測される。

本種が増えすぎることにより、希少な植物種への食害が増加する等、他の生物に対する負の影響が生じる可能性も示唆されることから、本種の動向については、今後も注視していく。

表 6-58 影響予測結果と確認状況（タヌキ）（哺乳類：4/8）

種名	影響要因	環境影響評価時		調査年度	確認地点数		
		予測結果	影響の程度		調査範囲	施区域 対象事業実	改変エリア
タヌキ	存在・供用	人の存在を警戒し、施設周辺の利用は減少する一方、餌を残飯などに依存する個体が現れるものと考えられる。また、実験フィールドで栽培される植物や実験動物の厩舎も本種を誘引する可能性が考えられる。対象事業実施区域の■■■■では、草刈りなどの管理頻度の低下により本種の生息域である高茎草草が出現すると予想される。交通量の増加に伴い、ロードキルの可能性がある。	影響小さい(影響個体が少ないか軽減可能)	環境影響評価(H17~18)	6	2	0*
				供用後の事後調査(H25~26)	44	34	21

*評価書では1地点と記載していたが、改変エリアでの確認はなかった。



注目すべき種の保護の目的から、
確認位置に係る情報は公表しない
こととしております。

凡例

- 対象事業実施区域
- 調査範囲
(対象事業実施区域境界より200m)
- 改変エリア

H25～H26確認種

● タヌキ

H17～H18確認種

● タヌキ

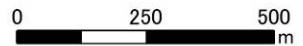


図 6-58 タヌキ確認地点

(オ) キツネ

キツネの影響予測結果と確認状況を表 6-59 に、環境影響評価時と供用後の事後調査におけるキツネの確認地点を図 6-59 に示した。

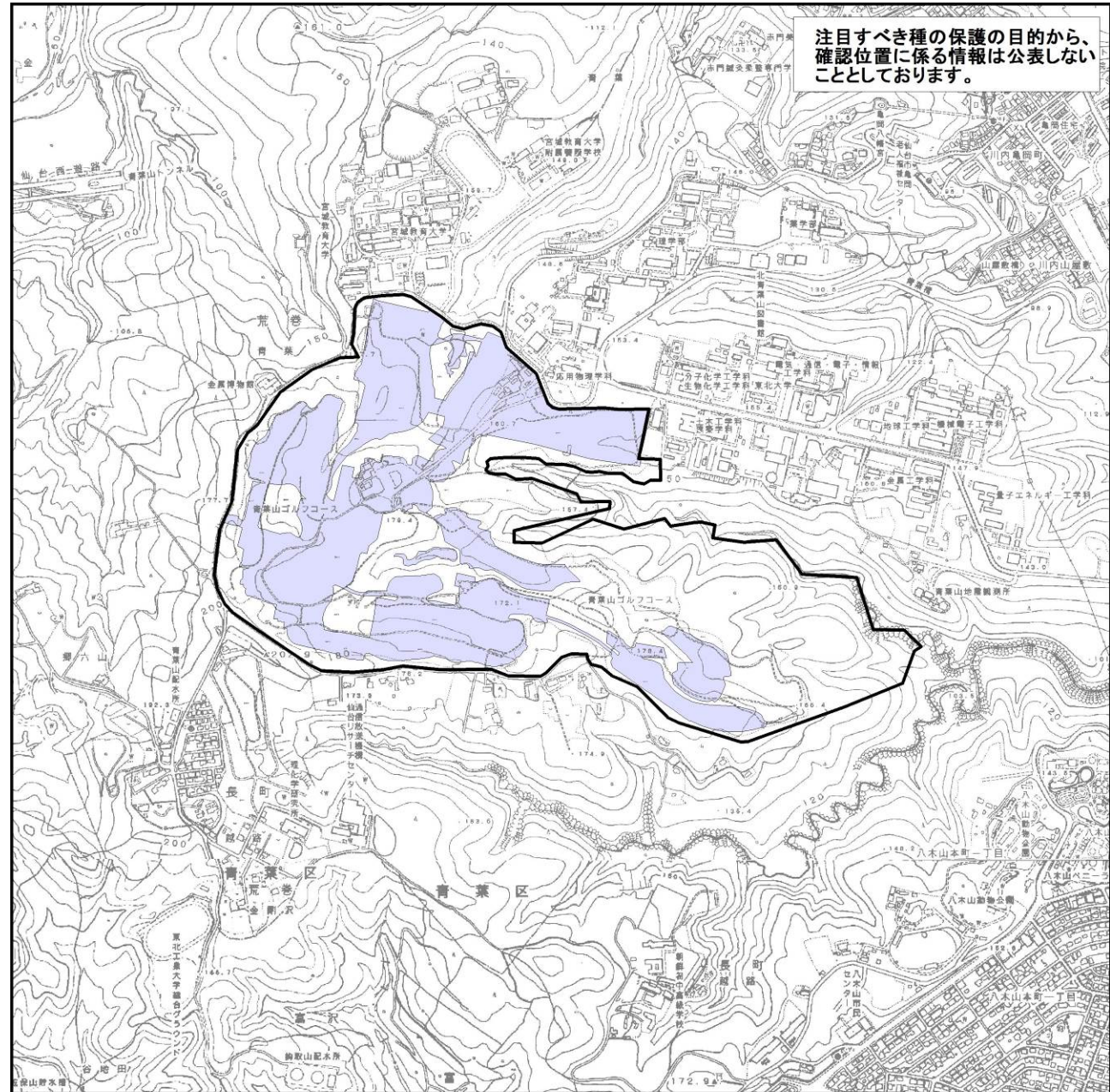
本種の確認は、環境影響評価時には調査範囲で 11 地点であったが、供用後の事後調査において調査範囲で 7 地点となり、確認地点数がやや減少した。対象事業実施区域の供用が開始されたことで、本種が人間を警戒し確認地点数が減少した可能性があると考えられる。本種は、人の存在を警戒し、一時的には事業実施区域の利用を避ける可能性があるが、一方で今後は、残飯や飼育される実験動物に誘引される個体も出てくると予測される。

なお、ロードキル対策にあたっては、エコトンネルの設置、関係者以外の通行制限等により、保全措置を講じている。

表 6-59 影響予測結果と確認状況 (キツネ) (哺乳類 : 5/8)

種名	影響要因	環境影響評価時		調査年度	確認地点数		
		予測結果	影響の程度		調査範囲	対象事業実施区域	改変エリア
キツネ	存在・供用	人の存在を警戒し、施設周辺の利用は減少する一方、餌を残飯などに依存する個体が現れるものと考えられる。また、実験フィールドで栽培される植物や実験動物の厩舎も本種を誘引する可能性があると考えられる。対象事業実施区域の■■■■では、草刈りなどの管理頻度の低下により本種の生息域である高茎草地が出現すると予想される。交通量の増加に伴い、ロードキルの可能性がある。	影響小さい(影響個体が少ないか軽減可能)	環境影響評価 (H17~18)*1	11	8	5
				供用後の事後調査 (H25~26)	7	6	3

*1 評価書では、調査範囲 14 地点、対象事業実施区域 12 地点、改変エリア 7 地点で確認と記載していたが、再度、調査データを精査した結果、調査範囲 11 地点、対象事業実施区域 8 地点、改変エリア 5 地点での確認であった。



注目すべき種の保護の目的から、確認位置に係る情報は公表しないこととしております。

凡例






- | | | |
|---|----------------------------|---|
|  | 対象事業実施区域 | H25～H26確認種 |
|  | 調査範囲
(対象事業実施区域境界より200m) |  キツネ |
|  | 改変エリア | H17～H18確認種 |
| | |  キツネ |



図 6-59 キツネ確認地点

(カ) テン

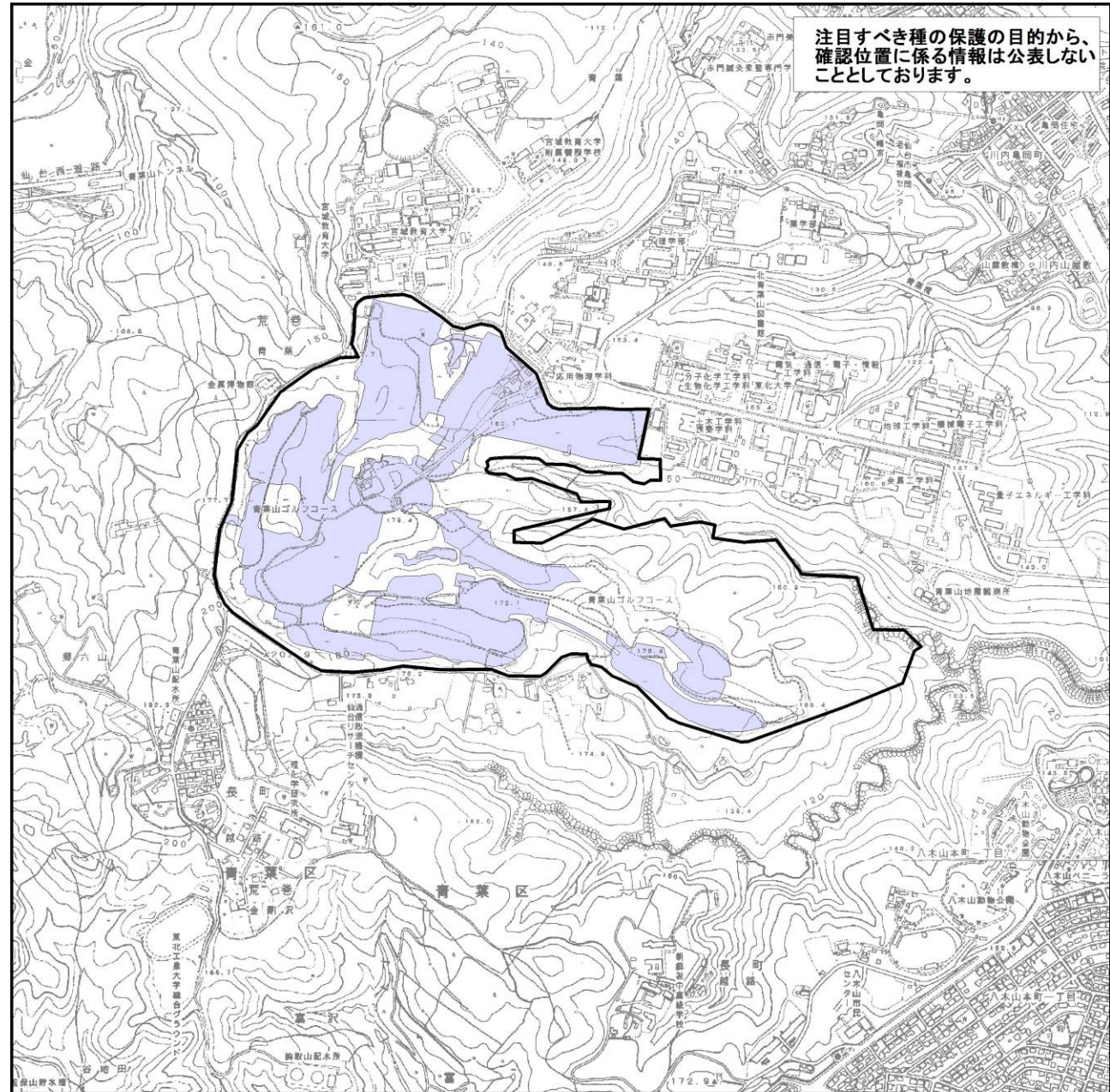
テンの影響予測結果と確認状況を表 6-60 に、環境影響評価時と供用後の事後調査におけるテンの確認地点を図 6-60 に示した。

本種の確認は、環境影響評価時には調査範囲で 4 地点であったが、供用後の事後調査においては調査範囲で 11 地点となり、確認地点数は増加した。本種の確認地点数は増加しており、事業による本種への影響はほとんどなかったと考えられる。

表 6-60 影響予測結果と確認状況（テン）（哺乳類：6/8）

種名	影響要因	環境影響評価時		調査年度	確認地点数		
		予測結果	影響の程度		調査範囲	施区域 対象事業実	改変エリア
テン	存在・供用	改変エリアの環境のほとんどは草地であり、本種の生息の本拠および採餌場とは異なる環境であることから、供用時の本種への影響はないか極めて少ないものと考えられる。	ほとんど影響なし	環境影響評価 (H17～18)	4*1	0	0
				供用後の事後調査 (H25～26)	11	7	1

*1 評価書では、調査範囲 5 地点で確認と記載していたが、再度、調査データを精査した結果、調査範囲 4 地点での確認であった。



注目すべき種の保護の目的から、
確認位置に係る情報は公表しない
こととしております。

凡例

- 対象事業実施区域
- 調査範囲
(対象事業実施区域境界より200m)
- 改変エリア

H25～H26確認種

● テン

H17～H18確認種

● テン

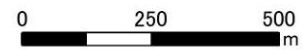


図 6-60 テン確認地点

(キ) アナグマ

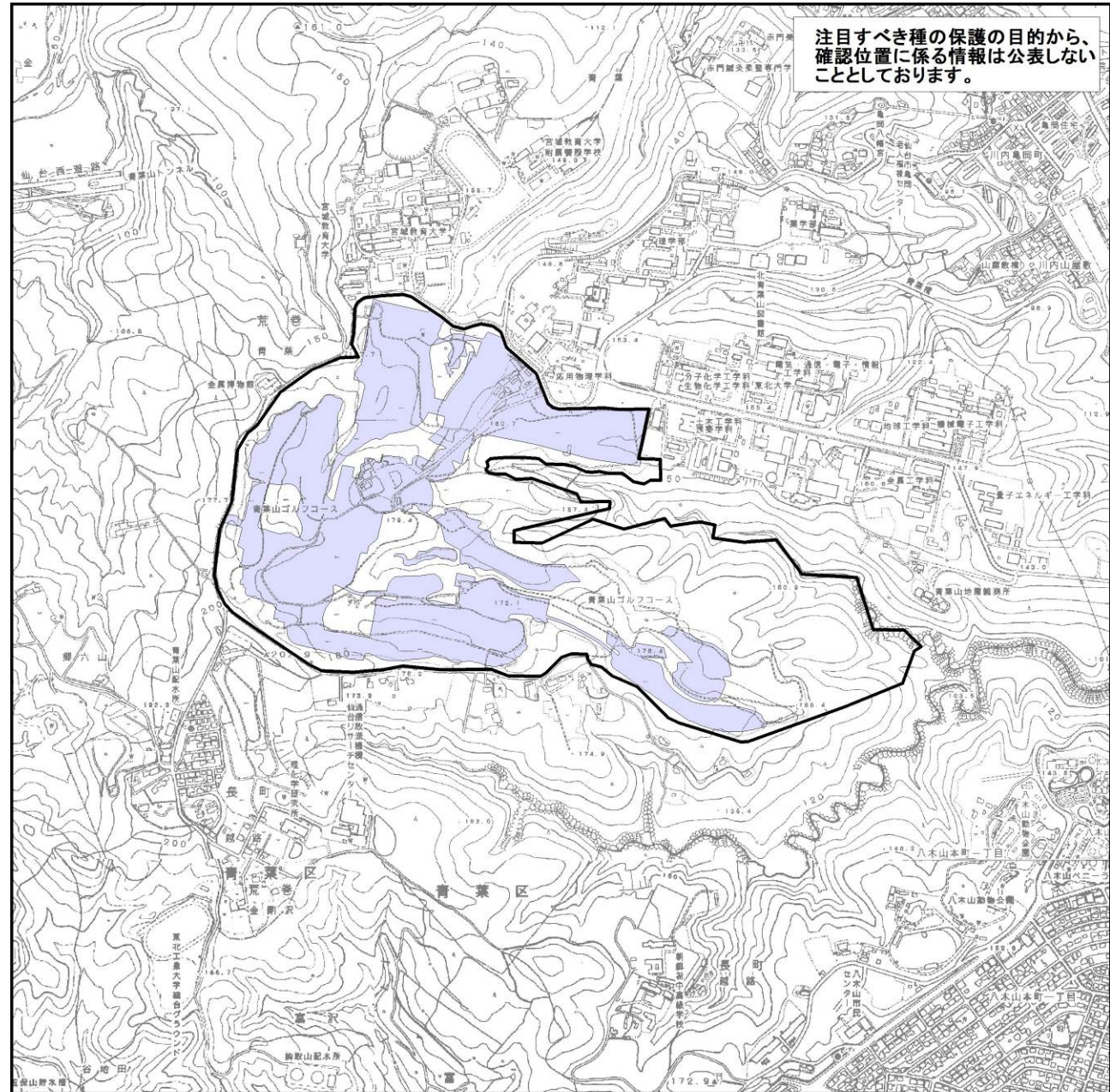
アナグマの影響予測結果と確認状況を表 6-61 に、環境影響評価時と供用後の事後調査におけるアナグマの確認地点を図 6-61 に示した。

供用後の事後調査において、本種は確認されなかった。環境影響評価時には、本種は調査範囲外の 2 地点で確認されたが、改変エリアからは 200m 以上離れた場所であり、改変エリア及び周辺の環境を本種が利用している可能性は低いため、本種への影響はほとんどなかったと考えられる。ただし、環境影響評価時の本地域の環境は、使用されていないゴルフ場であったのに対し、供用後の事後調査時には、土地が造成され建物等の建設工事が行われており、本種がこういった状況を忌避した可能性は否定できない。

表 6-61 影響予測結果と確認状況（アナグマ）（哺乳類：7/8）

種名	影響要因	環境影響評価時		調査年度	確認地点数		
		予測結果	影響の程度		調査範囲	施区域 対象事業実	改変エリア
アナグマ	存在・供用	本種の痕跡が確認された樹林は改変エリアから充分離れており、本種の生態から改変地域周辺の環境の利用はほとんどないと考えられ、供用時の本種への影響はないか極めて少ないものと考えられる。	ほとんど影響なし	環境影響評価 (H17～18)	0*1	0	0
				供用後の事後調査 (H25～26)	0	0	0

*1 評価書では、調査範囲 2 地点で確認と記載していたが、再度、調査データを精査した結果、調査範囲での確認はなかった。



注目すべき種の保護の目的から、確認位置に係る情報は公表しないこととしております。

凡例

- 対象事業実施区域
- 調査範囲
(対象事業実施区域境界より200m)
- 改変エリア

- H17～H18確認種
- アナグマ

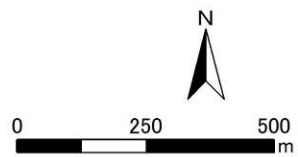


図 6-61 アナグマ確認地点

(7) カモシカ

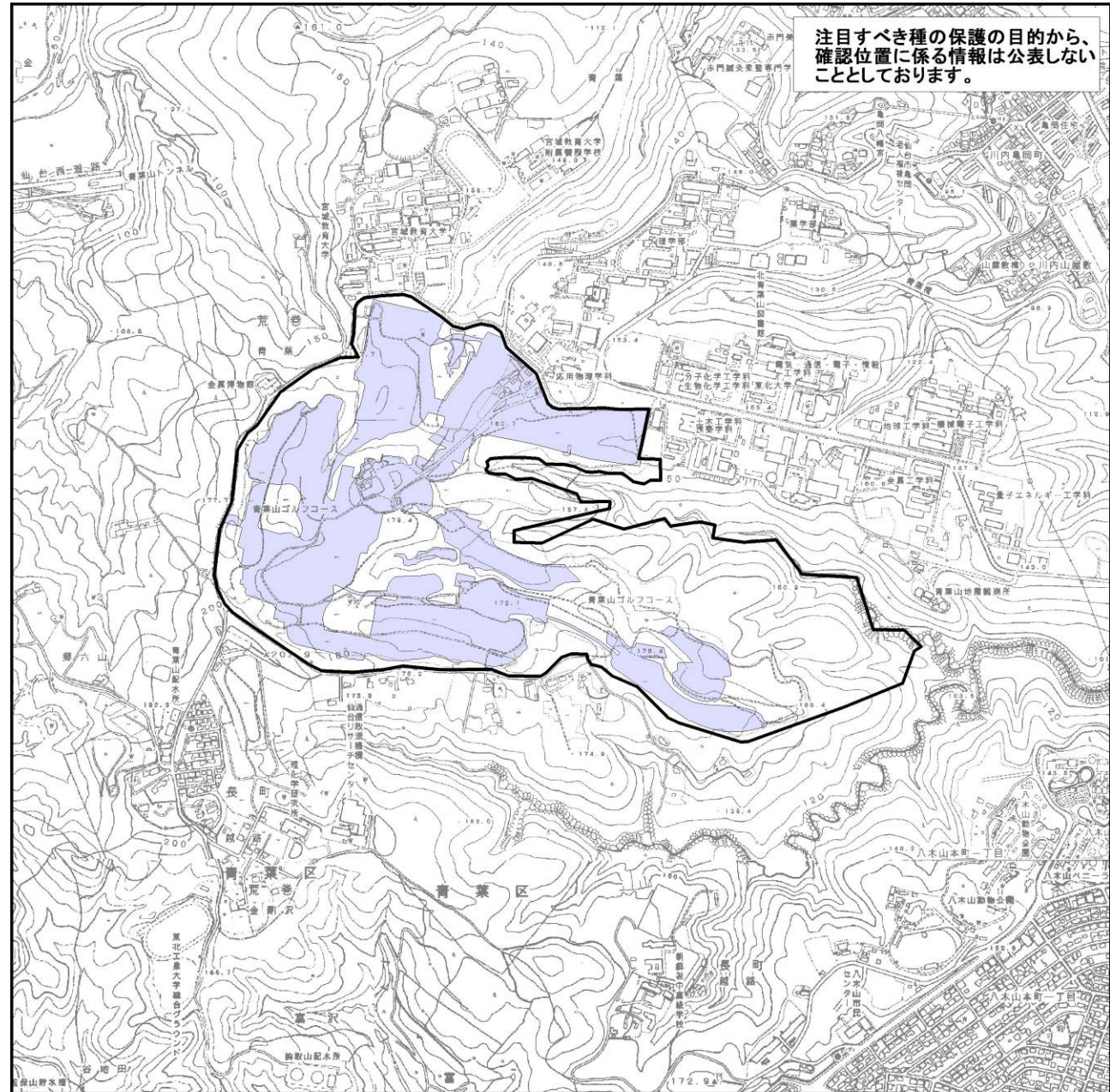
カモシカの影響予測結果と確認状況を表 6-62 に、環境影響評価時と供用後の事後調査におけるカモシカの確認地点を図 6-62 に示した。

本種の確認は、環境影響評価時には調査範囲で4地点であったが、供用後の事後調査においては調査範囲で7地点となり、確認地点数が増加した。また、供用後の事後調査では、対象事業実施区域あるいは改変エリアにおいても本種の姿や痕跡が確認されており、事業による本種への影響は、予測結果のとおり少なかったと考えられ、現在までのところ、対象事業実施区域での利用の減少はみられない。

表 6-62 影響予測結果と確認状況（カモシカ）（哺乳類：8/8）

種名	影響要因	環境影響評価時		調査年度	確認地点数		
		予測結果	影響の程度		調査範囲	対象事業実施区域	改変エリア
カモシカ	存在・供用	対象事業実施区域およびその周辺の樹林内で痕跡が確認されており、改変エリア付近の樹林や林縁も利用しているものとみられ、人の存在を警戒し、施設周辺の利用は減少するものと考えられる。	影響小さい（影響個体が少ないか軽減可能）	環境影響評価（H17～18）*1	4	2	0
				供用後の事後調査（H25～26）	7	4	1

*1 評価書では、調査範囲5地点、対象事業実施区域2地点で確認と記載していたが、再度、調査データを精査した結果、調査範囲4地点、対象事業実施区域2地点での確認であった。



注目すべき種の保護の目的から、
確認位置に係る情報は公表しない
こととしております。

凡例

- 対象事業実施区域
- 調査範囲
(対象事業実施区域境界より200m)
- 改変エリア

- H25～H26確認種
- カモシカ
- H17～H18確認種
- カモシカ

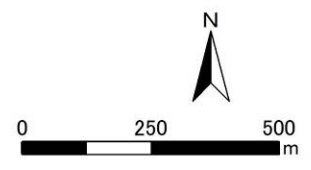


図 6-62 カモシカ確認地点